

源平閼諍録全釈（二三―卷一上⑬（二二ウ8（二四才9））

早川 厚一

【原文】

右兵衛佐ハ不_レ似_二彼_一○無_レ伝_二語_一人_一○者無_レ遣_二方_一○物思也加之祐親入道恐平家大_一秘欲_レ為_二夜討_一然彼入道之子息伊東九郎祐澄竊_二申_一ハ頼朝_二者祐澄之父入道俄_二天狗託_一其_二身_一候君相議奉_レ為_二夜討_一候設_二雖_一工_二非道_一雖_レ非_レ可_レ顯_二親過_一此_二項_一日奉_二相_一馴_二於_一君之上又_二不_レ有_レ指_一過_二不_レ言_一此事_二者_一寛_二照_一覽有_レ恐_二然_一只入_二道_一不_レ思_二立_一○前_二君須_一立_二出_一此_二所_一努_二々々_一不可_レ有_レ御披露_二候_一乍申_二波羅々々_一泣_二右兵衛佐言_一為_二入道_一其_二程_一被_レ思_二籠_一之上者頼朝雖_レ立_二忍_一此_二所_一可_レ來_二殃_一ハ不可_レ遁_二又_一於_二我_一身_一○無_レ謬_二者_一不_レ及_二為_一自_レ害_二汝_一志生_二々々_一世_二々々_一難_二言_一九郎即立_二去_一

【釈文】

右兵衛佐は彼には似ず、伝へ語らふ人も無ければ、遣る方も無き物思ひなり。加之、祐親入道、平家の尤めを恐れ、秘かに夜討に為んと欲。然るに彼の入道の子息、伊東九郎祐澄、竊かに頼朝に申しけるは、「祐澄の父入道、俄に天狗其の身に託き候ひて、君を夜討に為奉らんと相ひ議り候ふ。設ひ非道を工むと雖も、親の過を顕はすべきには非ずと雖も、此の頃（項）日君に相ひ馴れ奉りたる上、又指したる過も有さず。此の事を言はずは冥（寛）の照覧恐れ有り。然れば只、入道の思ひ立たざる前に、君須く此の所を立ち出でたまへ。努々御披露有るべからず候ふ」と申しながら、波羅々と泣きければ、右兵衛佐言ひけるは、「入道の為に、其れ程に思ひ籠められたる上は、頼朝此の所を立ち忍ぶと雖も、来たるべき殃をば遁るべからず。又我が身に於ては謬り無ければ、自害を為るには及ばず。汝が志、生々世々にも忘れ難し」と言ひければ、九郎即ち立ち去りぬ。

【注解】○右兵衛佐は彼には似ず、伝へ語らふ人も無ければ、遣る方も無き物思ひなり。これまでここからが、十一話「頼朝、北条の嫡女に嫁する事」の始めとされたが、まだ前話「頼朝の子息、千鶴御前失

なはるる事」の続きと考えられる。前節では、伊東三女の悲嘆の深さを、異朝の王昭君に譬え、頼朝の深い悲しみを、楊貴妃を失った唐の玄宗皇帝の悲しみに譬えていた。しかし、玄宗皇帝の場合は、方士を

介して楊貴妃と思いを交わすことも出来たが、頼朝には、玄宗皇帝の方士のように、自らの思いを伝える人もいないため、頼朝は、どうしようもない物思いに陥ったことを言う。真名本『曾我物語』や流布本『曾我物語』も、頼朝や北の方の思いを記すが、〈闘〉にやや近いのは、流布本『曾我物語』。真名本『曾我物語』「佐殿モ何^ナ御心^ミ不^サレ被^サ取延^ニ」兵衛佐殿の北の方奉^ル知^ル行^ル江^ヲ無^レ人^モ問^テ無^シ呼^フ方^モ（三九五頁）、流布本『曾我物語』「兵衛佐殿は、若君、北の御方御ゆくゑ、しらせたてまつる者なかりしかば、なぐさみたまふ事もなかりけり」（二〇八頁）。○加之、祐親入道、平家の尤めを恐れ、秘かに夜討に為んと欲。祐親が頼朝を夜討にしようとしたとする点、真名本『曾我物語』や流布本『曾我物語』も同じだが、真名本『曾我物語』は「伊藤の入道モ無^レ情^シ為^テ呼^フ後思^ニ嫌妨^ヲ、此兵衛佐殿は一定成^ニトナシ末代の敵^ニ、而^レ不^レ失^ハ此人^ヲ悪^シ思^フ」（三九三頁）と具体的に記す。〈名義抄〉「尤トガム」（仏下末二三）。○伊東九郎祐澄、竊かに頼朝に申しけるは、祐親の子息伊東九郎が、頼朝に急を告げたとする点は、〈延・盛〉真名本・流布本『曾我物語』は同じ。但し、伊東九郎の名前を異にする。〈延〉「助兼」（巻四一四〇オ）、〈盛〉「祐兼」（三一九二頁）、真名本『曾我物語』「助長」（三九三頁）、流布本『曾我物語』「祐清」（一〇八頁）。他に、〈長・南〉は「伊東九郎」として、名前不記、〈屋〉「祐澄」（四九二・四九三頁）、〈覚〉「祐氏」（下二二〇頁）、『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）十月十九日条「祐泰」、建久四年（一一九三）六月一日条「祐清」と様々である。坂井孝一は、『吾妻鏡』の記事の中では、一応の信頼に足る記事は記事内容の検証により、治承四年条とするが、どれが九郎

の名を正確に伝えた記事であるのかは不明であるとする（九七・一〇二頁）。なお、『吾妻鏡』の寿永元年（一一八二）二月十五日条に、「去安元々々年九月之比、祐親法師欲奉^ニ誅^ス武衛」。九郎聞^ニ此事、潜告申之間、武衛逃^ニ走湯山^ニ給^ニと見える。○祐澄の父入道、俄に天狗其の身に詫き候ひて、君を夜討に為奉らんと相ひ議り候ふ。父祐親が頼朝を討とうとしていることを子の伊東九郎が告げる点は同じだが、祐親に天狗が付いたするのは〈闘〉独自。この後に、父祐親の行為を「非道」ともする。〈延〉「尾籠ノ事ヲノミ振舞侍ル上、悪行ヲ企ト仕ル」（巻四一四〇オ）、真名本『曾我物語』「小事を申^テ成^テ大事^ニ、殆^ト可^レ乱^ル世^ヲ見^ヘ候」（三九三頁）、流布本『曾我物語』「ものにくるい候て、君をうちたてまつらんとつかまつり候へ」（一〇八頁）と、祐親を批判的に記す点は同じ。この後に記される時政との対照もある。また、夜討とする点は、真名本『曾我物語』も同じ。「兵衛佐殿を為^ニトシ夜討^ニ友渡^ヲ（支度）」、既^ニ調^ヘて軍兵^ヲ分^テてけり方々^ノ道^ヲ、郎等共^ニ鍬^ヲ甲冑^ヲ、帶^ヲ兵杖^ヲ、明日卯^ノ時^ニは夜^ニ込^ニ欲^ス向^ニ佐殿^ノ御所^ニ」（三九三頁）。夜討は卯の時の予定であったとする。明け方に近いが、明け方の攻撃でも「夜討」と言うのは次の例からも明らか。〈延〉「猿程ニ夜モアケ方ニ成ケレバ、平家『敵ノ多勢ニテ夜討ニ寄タル』トサワギケル程ニ、火ヲ出テ見レバ、僅ニ百騎計也」（巻六七七四オ）。○設ひ非道を工むと雖も、親の過を顕はすべきには非ずと雖も…たとい親が非道を企んだとしても、子が親の咎を明るみにすべきではないといっても、この日頃、君に慣れ親しみ申し上げている上、君にはさしたる罪もありではないの意。九郎が頼朝に注進に及んだ理

由を記す当該記事は〈闕〉の独自本文。〈名義抄〉「工 タクミ」(仏上七五)。「頃日」を「ひごろ」と読む訓例、〈闕〉には、これ以降六箇所に見られる。○此の事を言はずは冥(寔)の照覧恐れ有り〈闕〉の独自本文。このことを言わなければ、神仏の咎めがきつとあるであろうことを言う。「寔」は、〈闕〉ではこのみに見える。

〈名義抄〉「寔 アス、オク」(法下五九)。朱筆の書入れに見るように、「冥」の誤りと考えられる。○努々御披露有るべからず候ふ 決して伊東の地を出て行くことを人に知らせないでくださいの意。〈闕〉の独自本文。○入道の為に、其れ程に思ひ籠められたる上は、頼朝此の所を立ち忍ぶと雖も、来たるべき殃をば遁るべからず やや分かりづらい本文だが、近似本文は次のように見られる。〈延・盛〉「入道ニ思ヒ懸ラレテハ、イツクヘカハ遁ルベキ」(〈延〉巻四—一四〇オ)、真名本『曾我物語』「但 佐様被^レ思懸^ハ上、在^ハ何^ハ当国内^ニ可^ハ難^ハ遁^ル」(三九頁)、流布本『曾我物語』「まことに思ひかけられなば、いづくへゆきてものがるべきか」(一〇九頁)。入道が私を夜討にしようとしてまで決心された以上は、私がこの所を発ち、身を潜めたとしても、この後に来るだ

ろう災いを逃れることはできないだろうの意。○又我が身に於

ては謬り無ければ、自害を為るには及ばず 近似本文は次のよう

に見られる。〈延・盛〉「身ニアヤマツ事無レバ、又自害ヲスベキ

ニモ非」(〈延〉巻四—一四〇オ)、真名本『曾我物語』「而^ハ亦无^ク誤^ル事无^ク左右不^レ及^ハ自害^ヲを^ハする^ニ」(三九頁)、流布本『曾我物語』

「されども、左右なく自害するにおよばず」(一〇九頁)。○汝が志、

生々世々にも忘れ難し 〈闕〉の独自本文。〈延・盛〉「只命ニ任セ

テコソアラメ」(〈延〉巻四—一四〇オ)。ただ運命に任せてみよう

の意。真名本『曾我物語』「可^ハ計^ハ吉^キ様^ニ」(三九頁)。流布

本『曾我物語』では、伊東九郎から報告を受けた頼朝は、「いかさま、

われをたばかるにこそとて、うちとけたまふ事なし」として、前

項の本文に続いて、「人手にかゝらんよりは、なんぢ、はやく頼朝

が首をとって、父入道に見せよ」(一〇九頁)と言う。すると、伊

東九郎は、伊豆山権現と箱根権現とに、偽りなきことを誓ったと

ころ、頼朝は大いに喜んで、「かやうにつげしらする心ざしならば、

いかにもよきやうにあひはからい候へ」(一〇九頁)と、真名本『曾

我物語』に近似した本文が続く。

【原文】

十一 頼朝嫁北条嫡女事

右兵衛佐召^ニ定^ム綱盛^ハ長言^ハ祐親^ハ入道^ニ可^ハ討^ル頼朝^ハ之^ヲ由蜜^ニ聞^ク得^ル此^ハ設^ニ頼朝^ハ一人^ニ雖^モ被^ル討^ハ己^ハ等^ハ不可^ハ討^ル己^ハ等^ハ食^ニ項留^ル此^ハ後^ニ一日^ニ可^ハ尋^ル頼朝^ハ言^ニ盛^ハ長定^ハ綱申^ハ所詮^ハ候^ニ彼^ハ入道^ニ不^レ思^ハ立^ル之前^ニ還^ル欲^ハ討^ル此^ハ候^ニ彼^ハ等^ハ二人^ニ思^ハ切^テ出^ル立^ル右兵衛佐言^ハ兼^ニ如^ク言^ハ未^ハ討^ル父^ハ敵^ハ清盛^ハ入道^ハ之間^ニ雖^モ有^ル何^ハ事^ハ我^ハ不可^ハ騒^ル相^ハ構^ハ汝^ハ等^ハ可^ハ抑^ル静^ニ乘^ル大^ハ黒鹿^ハ毛^ハ云^ハ馬^ハ相^ハ具^ハ鬼^ハ武^ハ云^ハ舍^ハ人^ハ八月^ニ十七^ニ日^ニ夜^ハ半^ニ計^ハ打^ハ出^ル伊^ハ東^ハ館^ハ馳^ハ越^ル北^ハ条^ハ夜^ハ漸^ニ明^ル定^ム綱盛^ハ長^ハ追^ハ跡^ヲ尋^ル行^ハ右^ハ兵衛^ハ佐^ハ祈^ハ念^ハ被^レ申^ス者

南無婦命頂礼八幡三所可聞食。頼朝之先祖伊与守頼義朝臣迫奥州貞任之時以嫡男義家為八幡大菩薩氏子其名字八幡太郎依此大菩薩至氏子有可護云御誓然頼朝者是自八幡殿四代氏子也可然者八幡大菩薩日本國頼朝令打隨給欲打取頼朝之子敵伊東入道言了二所權現被致精誠同十一月下旬之比右兵衛佐伊東之娘猶不懲北条四郎之最愛嫡女秘忍被通有不此世契故慍結階老時政夢不知此事北条勤大番下程從路而聞此事乍大驚歎恐平家威故同道下向平家侍伊豆目代和泉判官兼隆令約束然間同十二月二日取還於娘渡目代兼隆之許雖然女房都靡末成亥剋以前秘逃出彼所速致伊豆御山宿坊被立使者於頼朝許十日右兵衛佐上鞭馳來目代雖聞及此彼山者為大衆強所之間輒難取兼隆者不及力止北条聞此令勸當娘

【釈文】

十一 頼朝、北条の嫡女に嫁する事（同じき十一月下旬の比）

右兵衛佐、定綱・盛長を召して言ひけるは、「祐親入道、頼朝を討つべき由、密かに此れを聞き得たり。設ひ頼朝一人こそ討たると雖も、己等は討たるべからず。己等、食頃（頃）此に留まり、後日に頼朝を尋ねべし」と言ひければ、盛長・定綱申しけるは、「詮じ候ふ所、彼の入道思ひ立たざる前に、還つて此れを討たんと欲ひ候ふ」とて、彼等二人思ひ切つて出で立ちければ、右兵衛佐言ひけるは、「兼ねて言ひしがごとく、未だ父の敵清盛入道を討たざる間、何事の有ると雖も我と騒ぐべからず。相ひ構へて、汝等抑へ静むべし」とて、大黒鹿毛と云ふ馬に乗り、鬼武と云ふ舍人を相ひ具し、八月十七日の夜半ばかりに、伊東の館を打ち出でて、北条へ馳せ越えけり。夜も漸く明けければ、定綱・盛長跡を追ひ、尋ね行きぬ。

右兵衛佐、祈念して申されけるは、「南無婦命頂礼、八幡三所聞こし食すべし。頼朝の先祖伊与守頼義朝臣、奥州の貞任を迫めし時、嫡男義家を以て八幡大菩薩の氏子と為て、其の名を八幡太（大）郎と号す。此れに依つて、大菩薩、氏子に至るまで護るべしと云ふ御誓ひ有り。然るに頼朝は是れ八幡殿より四代の氏子なり。然るべくは八幡大菩薩、日本國を頼朝に打ち随はしめたまへ。頼朝の子の敵、伊東の入道を打ち取らんと欲ふ」と言ひ了て、二所權現に精誠を致さる。

同じき十一月下旬の比、右兵衛佐、伊東の娘に猶懲りず、北条の四郎の最愛の嫡女に、秘かに忍びて通はれけり。此の世ならぬ契りにて有りけり。故に慍に偕（階）老を結びぬ。時政は夢にも此の事を知らず。北条、大番を勤めて下りける程に、路よりして此の事を聞き、大きに驚きながら、平家の威を歎き恐れしが故に、同道して下向しける平家の侍、伊豆の目代和泉の判官兼隆に約束せしむ。然る間、同じき十二月二日、娘を取り還し、目代兼隆の許へ渡す。然りと雖も、女房都靡かず。未だ亥の剋に成らざる以前に、秘かに彼の所を逃れ出でて、速やかに伊豆の御山の宿坊に致れり。使者を頼朝の許へ立てられければ、十日、右兵衛佐、鞭を上げて馳せ來たる。目代此れを聞き及ぶと雖も、彼の山は大衆強き所

たる間、輒たずくも取り難し。兼隆は力及ばず止みにけり。北条此れを聞き、娘を勘当せしむ。

【校異・訓読】 1 〈全注闕〉は、「此れを討ち候はん」(上―一六四頁)と読むが、返り点に従って掲出のように読んだ。

【注解】○頼朝、北条の嫡女に嫁する事(同じき十一月下旬の比)「十一

月下旬の比」とは、本文中に、頼朝が時政の嫡女政子に通い始めた月日として「同じき十一月下旬の比」として記載がある。「同じき」とは、前段に記される嘉応元年(一二六九)を指す。○右兵衛佐、定綱・

盛長を召して言ひけるは 先にも、〈闕〉の独自記事として、頼朝が

定綱や盛長に、伊東三女のことを相談する場面があった。定綱や盛長については、本全釈の注解「流人右兵衛佐頼朝、藤九郎盛長・佐々木

太郎定綱を召して言ひけるは」(一一―一一頁)参照。当該記事の類

似記事としては、〈延・盛〉「野三刑部成綱、足立藤九郎盛長ナドニ仰

合ケルハ」(〈延〉巻四―一四〇オ―一四〇ウ。〈盛〉は「成綱」を「野

三刑部盛綱」(3―九二頁)とする)、真名本『曾我物語』「佐殿盛長

盛綱とて朝夕不離御身侍有二二人一、合て彼等とて被け仰は」(三九頁)。

また、流布本『曾我物語』には、この後に、頼朝から「いかにもよき

やうにあひはからい候へ」と言われた祐親の子祐清が「藤九郎盛長、

弥三郎成綱をば、君御座のやうにて、しばらくこれにおかれ候べし」

(一〇九頁)と進言する場面がある。真名本『曾我物語』の「盛綱」は、

「成綱」の誤りの可能性もあるが、佐々木秀義の子、定綱の弟で、頼

朝に近侍した盛綱か。〈延〉の「野三刑部成綱」は、野三大夫成任の子、

野三刑部丞成綱(「小野氏系図」続群書七上―一八頁)とも、野大

夫成朝の子、小野野三刑部丞尾張国守護成綱(「小野朝臣」『古代氏族

系譜集成』上―二八五―二八六頁)か。成綱は、横山党小野の出自で、

横山党は頼朝没後、建保元年(一二二三)の和田の乱で大きな打撃を

受け、成綱の子盛綱は承久京方武士となったとも伝え、十三世紀中葉

には勢力を失ったのに対し、佐々木定綱は、父秀義が平治の乱に義朝

に与したため、本領の近江国佐々木庄を離れ、その子の四兄弟は山本

の挙兵以来の幕府の創設事業に貢献し、全国各地に敷衍した。福田豊

彦は、以下の発言は、幕府成立後も、荘園領家や京都の権門と衝突し、

幾度も配流される定綱の方が適任とも考えられるとし、〈闕〉作者ま

たはこの説話の製作者が、既に子孫も絶えた小野成綱の代役を「した

たか者」の佐々木定綱に振り替えた可能性も考えられるとする(四七

頁)。本全釈の注解「定綱は苟くも宇多天皇の後胤、近江源氏の最中

なり」(一一―一四頁)参照。○設ひ頼朝一人こそ討たると雖も、

己等は討たるべからず…祐親の狙いは頼朝一人にあるわけだから、

お前達は討たれることはないはずだの意。真名本『曾我物語』の

「各々に不可有別レの事、只此の家に是レ可候レ」(三九頁)は、〈闕〉本

文に近似する。〈延・盛〉「頼朝一人遁出ムト思也。コ、ニテ助親法師

ニ無故命ヲ失ハム事、云甲斐無ルベシ。汝等カクテアラバ頼朝ナト

人知ベカラズ」(〈延〉巻四―一四〇ウ。傍線部は、〈盛〉「ナシト」

(3―九三頁)」。お前達がここにいれば、頼朝が姿をくらませたと

人はどうして知ろうの意で、二人をここに残し、頼朝が逃げることを、

いずれも頼朝が言い出す形。一方、流布本『曾我物語』の場合は、祐

親の子祐清が、「藤九郎盛長、弥三郎成綱をば、君御座のやうにて、

しばらくこれにおかれ候べし。君は、大鹿毛にめされて、鬼武ばかり

めし具し、北条へ御しのび候へ」(一〇九頁)と言ったとする独自の形。

○己等、食頃（項）此に留まり、後日に頼朝を尋ねべし 本文異同については、前項参照。「食頃」を、〈全注闘〉は、『角川古語大辞典』の見解（三―三二〇頁）を採用し、「しよくけい」と読み、「食事をすすめるくらいにわずかな時間。しばらく。まもなく」（上―一六五頁）の意とする。しかし、ここは訓読符が付されていることからすれば、別の読みが必要となろう。『三教指帰』に「食頃蘇息。似醒不言」（旧大系一三七頁）とあり、その訓読文を「食頃あつて蘇息して醒に似て言はず」とするように、「食頃」は、「しばらく」と読んで良からう。お前達は、暫くここに留まり、後日に私を訪ねよの意。○詮じ候ふ所、彼の入道思ひ立たざる前に、選つて此れを討たんと欲ひ候ふ「詮じ候ふ所」を、〈全注闘〉は、「所詮候ふ」（上―一六四頁）と読むが、掲出の読みが良いか。〈延〉「所詮候」只コザカシキ申状ニテハ候ヘドモ（巻三―一八三ウ）。盛長と定綱が、結局、あの入道が夜討を決起する前に、先手を打って入道を討とうと思ひますとの言は、〈闘〉独自の趣向。先にも、〈闘〉の独自記事として、伊東三女の件を相談する頼朝に対して、盛長は自重を求めたのに対し、定綱は「内々仰せられんに、若し用ゐずば、則ち我等此れを抑へて取るべし」（本全釈一―一九頁）と強硬論を唱えている。そうした設定にも近いものがある。但し、真名本『曾我物語』にもやや近似した本文が見られる。「或人の申けるは、左右思食（シ）切、一矢射敵（ヤ）一人討取（テ）成（リ）左（サ）右（マ）候（ハ）はヤト申ケルは」（三九頁）。或人の言であり、祐親を討つのではなく、「敵の一人なりとも」討つて何とでもなりましようとする点異なる。○兼ねて言ひしがごとく、未だ父の敵清盛入道を討たざる間、何事の有ると雖も我と騒ぐべからず。相ひ構へて、汝等抑へ静むべし かねてから言つて

いたように、父義朝の敵清盛入道を討たない間は、何事があるうとも自分から騒ぐようなことはするな。よくよく自重せよの意。「兼ねて言ひしがごとく」とあるように、先にも千鶴御前誕生に際し、頼朝は「此の子十五に成らん時、伊東・北条を相ひ具して先陣に打たせ、定綱・盛長を指し廻らし、東国の勢を招き、頼朝都に馳せ上つて、父の敵清盛を打たんと欲ふ」（本全釈一―一九頁）と言っていた。しかし、この後の頼朝の祈念「然るべくは八幡大菩薩、日本国を頼朝に打ち随はしめ給へ」とは、厳密に言えば整合しない。なお、「清盛入道」と言う点について、清盛の出家は、仁安三年（一一六八）二月十一日のこと。〈闘〉は伊東祐親が大番役が終わり、京から下向した日を嘉応元年（一一六九）七月のこととしていて問題はないが。それに関連する問題は、本全釈の注解「嘉応元年（己巳）丑七月十一日」（二一―八頁）を参照のこと。○大黒鹿毛と云ふ馬に乗り、鬼武と云ふ舎人を相ひ具し〈延・盛〉真名本『曾我物語』はいずれも、「大鹿毛ト云馬ニ乗り、鬼武ト云舎人バカリヲ具シテ」（〈延〉巻四―一四〇ウ）とする。流布本『曾我物語』は、祐親の子祐清が「君は、大鹿毛にめされて、鬼武ばかりめし具し、北条へ御しのび候へ」（二〇九頁）と言ったとする。鬼武は系譜等未詳。○八月十七日の夜半ばかりに、伊東の館を打ち出でて、北条へ馳せ越えけり 頼朝が、伊東の地を出た日を、〈延・盛〉は「夜半バカリ」（〈延〉巻四―一四〇ウ）とするのみだが、真名本『曾我物語』は、「如法の夜半（なるに）……比は八月下旬の事（なるに）」（三九―四〇頁）、流布本『曾我物語』は「頃は、八月下旬の事なるに」（二一〇頁）とする。このように、頼朝は八月十七日（下旬）に、伊東から北条へ逃れたとするのだが、『吾妻鏡』は、別の事情を次のよ

うに記す。「去安元々年九月之比、祐親法師欲奉誅武衛。九郎聞此事、潜告申之間、武衛逃走湯山給」(寿永元年二月十五日条)。これによれば、頼朝は、安元元年(一一七五)九月の頃に、伊東から走湯山に逃げたとする。この記録を前提として、後藤丹治は、『吾妻鏡』元暦元年(一一八四)四月二十一日条・六月二十七日条の志水冠者に関わる記事からすれば、大姫は元暦元年当時決して幼少だったとは思われないとして、『元暦元年に既にこの年配に達した息女を持った頼朝と政子とは、少なくとも承安年代には結婚してゐたものと見ねばならない』(三三五頁)とした。この論に従うならば、福田晃の指摘するように、北条に至り政子と契つて。のち政子に迎えられて伊豆山に籠もったとする説話部分は虚構であつて、頼朝は伊東より真つ直ぐ伊豆へ逃れたという『吾妻鏡』の記事を史実と取るのが妥当だということになる(九〇頁)。

○夜も漸く明けければ、定綱・盛長跡を追ひ、尋ね行きぬ 近似本文は、〈延・盛〉真名本『曾我物語』にも見えるが、いずれもこの後に続く祈誓記事の後に記す。〈延〉「盛綱・盛長ハ、兵衛佐ノガレ出給テ後ハ、一筋ニ敵ノ打入ラムズルヲ相待テ、名ヲ留ル程ノ戦此時ニ有ト思ケル程ニ、夜モヤウく明ニケレバ、各モ出去ニケリ」(巻四―一四一オ)、真名本『曾我物語』「其の後留^{りたりける}伊藤御所^下藤九郎盛長以下の留主^{守藏}の人々、連^つ御跡^下追々^に皆参^{けり}北条御所^下」(四一頁)。

○南無婦命頂礼、八幡三所聞こし食すべし… 八幡三所、「八幡宮にまつられた三神。一般には応神天皇・神功皇后・比売神(ひめがみ)または仲哀天皇」(日国大)。すなわち、この後に「大菩薩」「八幡大菩薩」とあるように、〈延・盛〉、真名本・流布本『曾我物語』の「八幡大菩薩」に同じ。

○頼朝の先祖伊与守頼義朝臣 真名本『曾

我物語』頼朝^が先祖八幡太郎義家^は」(四〇頁)。奥州合戦に見るように、この時頼朝が強調したのが、曩祖將軍頼義の故実であつた(川合康①)。しかし、鎌倉時代後期以降、源頼朝が「曩祖將軍」として崇拜した源頼義にかわつて、源義家の英雄伝説が東国武士社会で肥大化していったとする(川合康②五六頁)。あるいは、野口実は、源氏の先祖として、頼義に代わつて義家が登場してくるのは、南北朝の動乱の過程で勢力を強めた同じ源氏系の武田氏・佐竹氏らに対抗し、庶流を含めて足利氏の源氏における正統性を主張するためと考える(二二七頁)。真名本『曾我物語』が、頼朝の先祖を義家とするのは、そうした背景を想定することもできよう。但し、〈闘〉の場合は、問題が簡単ではない。それは、巻一上の始めにある坂東平氏の系譜記事の「其の子に常長千葉介大夫、十二年の合戦の時、官兵に駈られ、八幡殿の御共^に有りが、海道の大手の大將軍たり」(四ウ)が問題となる。この場合の十二年の合戦とは、前九年の合戦を指す(志立正知七七頁、野中哲照三七四―三七六頁)。ここでは、「八幡殿御共」とある点が問題となる。当然ここは義家ではなく頼義でなければならない。志立正知はこの点を問題とし、あえて義家としているところに、それを求める千葉氏の事情と、義家由来を起点とするのを常識とする東国武士社会共通の認識があつたと考える(七二頁)。なお、この後の注解「然るに頼朝は是れ八幡殿より四代の氏子なり」参照。

○奥州の貞任を迫めし時、嫡男義家を以て八幡大菩薩の氏子と為て、其の名を八幡太(大)郎と号す 義家が八幡太郎と名乗つたことに関わる伝承は、真名本『曾我物語』や『平家物語』諸本、諸系図等にも記される。真名本『曾我物語』「八幡太郎義家^は、男山石清水参籠の時、示現^{とて}成^て大菩薩。御子^は、

「云八幡太郎^と得^た名^を」(四〇頁)、〈覚〉「十三で元服しけるも、八幡へ参り八幡大菩薩の御まへにて、「我四代の祖父義家朝臣は、此御神の御子となつて、名をば八幡太郎と号しき」(上―三四〇頁)〈盛〉「高祖父頼義蒙夢告、怪傀^{こゝろ}軀^こ腹^{はら}二男子ヲナス。即八幡ノ宮ニ奉テ、八幡太郎ト世ニ申伝タリ」(7―三六五―三六六頁)、〈尊卑〉「父頼義朝臣参詣宗廟。於社壇賜三寸靈劍之由蒙感夢之告。……自蒙彼靈夢^二之月妻室懷胞、即令^三出生男子畢。今義家朝臣是也。仍七歳春於^四祖神社壇依^レ加^二首服、号^三八幡太郎云々」(三一―二四頁)。義江彰夫によれば、頼義は康平六年(一〇六三)を境に崇拜の対象を菅田八幡から石清水八幡へと転換して(五―六頁)、それを受けて、今野慶信は、義家と石清水八幡宮の關係が強調されていくことになったとする(三七頁)。但し、義家と同母の二人の弟たちのうち、義綱は賀茂社、その下の義光は園城寺の新羅明神でそれぞれ元服しているから、義家元服の段階では、まだ八幡が氏神と確定していたわけではなかったことになる(元木泰雄六七頁)。○大菩薩、氏子に至るまで護るべしと云ふ御誓ひ有り 真名本『曾我物語』は、「而^は自^二八幡太郎^一子孫^ニにセシトコソ^一有^レ恙^一有^レ恙^一御誓^ハ」(四〇頁)とし、以下、八幡に関わる「八尽くし」記事が続く。○然るに頼朝は是れ八幡殿より四代の氏子なり 「八幡殿より四代の氏子」とは、義家から数えて為義・義朝・頼朝と数えるのであろう。義家の子義親を省くことになる。同じ認識は、真名本『曾我物語』にも、「八代守護の御誓空^{シテ}残^二」(四代を^二可^レ口惜^{カル}」(四一頁)として見られる。「八尽くし」記事の関連で、八代守護の御誓ひがあるのに、あと四代を残して(とすれば、八代目とは誰を想定するのか興味深い問題だが)頼朝の代で

潰えてしまうのは残念だとするのだが、と言うことは、先に「頼朝^か先祖八幡太郎義家^は」(四〇頁)とあったように、ここも、義家・為義・義朝・頼朝と数えていることになる。〈尊卑〉によれば、為義の実父は義親で、義家により義忠の子とされ源氏の後継者とされたということになる。「父滅^レ之後幼稚孤露、仍為祖父義家朝臣命、備叔父義忠繼嗣^二而義忠又死亡之後、擬^三祖父子、為^四直与継子云々」(三―二三―三頁)。しかし、北酒出本『源氏系図』を調査した佐々木紀一によれば、為義は義家の子であり、義親は為義の異腹の兄であり、『殿暦』天仁二年(一一〇九)二月十七日条に「義家朝臣四郎男為義」とあり、『日記』康治元年(一一四二)八月三日条に「義家子」とあるように、為義は義家の実子と考えるべきである(二二―二五頁)。〈闘〉や真名本『曾我物語』の当該記事には、そうした事実の反映があると見るべきだろう。但し、〈闘〉の「八幡殿より四代の氏子」とする記事は、先の「頼朝の先祖伊与守頼義朝臣」とする記事とは、頼朝の先祖を頼義とするか義家とするかという問題に揺れを生じていると見るべきだろうか。○然るべくは八幡大菩薩、日本国を頼朝に打ち随はしめたまへ。頼朝の子の敵、伊東の入道を打ち取らんと欲ふ 頼朝の祈請を他本は次のように記す。〈延・盛〉「南無婦命頂礼八幡大菩薩、義家朝臣ガ由緒ヲ不被捨^レ者、征夷ノ將軍ニ至テ朝家ヲ護リ、神祇ヲ崇メ奉ベシ。【其運不^ハ至^一、坂東八ヶ国ノ押領使ト成ベシ。】其^レ猶^ハ不可叶者、伊豆一國ガ主トシテ、助親法師ヲ召取テ、其怨^ヲ報ヒ侍ラム」(〈延〉卷四―一四〇ウ。〈盛〉は、【】の記事を欠く。この記事に続けて、「其^レ猶^ハ」とあることから「べし」の目移り(「崇メ奉ベシ」「成ベシ」)による脱落と考えられる)。〈延〉の場合、卷五冒頭の記事で、頼朝が

拳兵を思い立った理由として、「其故ハ、年来ノ宿意モサル事ニテ、高雄文学ガ勧トゾ聞ヘシ」(巻五―二ウ)と記されている。その中の「年来ノ宿意」については、巻四の頼朝伊豆流離説話の中で具体的に記されていた。「前兵衛佐頼朝ハ、去永暦元年、義朝ガ縁坐ニ依テ伊豆国へ被流罪タリケルガ、武蔵・相模・伊豆・駿河ノ武士共、多ハ頼朝ガ父祖重恩ノ輩也。其好ミ忽ニ可忘ナラネバ、当時平家ノ恩顧ノ者ノ外、頼朝ニ心ヲカヨハシテ、軍ヲ発サバ命ヲ可奇之由シメス者、其数有ケレバ、頼朝モ又心ニ深く思キザス事有テ、世ノアリサマヲ伺ヒテゾ年月ヲ送ケル」(巻四―三七ウ―三八オ)。頼朝が配流された伊豆ばかりでなく、武蔵・相模・駿河の父祖重恩の武士達も、昔の恩顧を忘れず、頼朝が戦を起こしたならばすぐにでも駆けつけようとする者達であったため、心に深く秘めるものがある頼朝も、世間の様子を窺いながら年月を送っていたとする。さらに、頼朝の思いが、より具体的に記されるのが、先に引いた祈請場面の一節である。その折の、頼朝の第一の祈請は、我が子を殺し自分の命を狙う祐親の討滅を誓う言葉ではない。平家討滅を直接に誓う言葉ではないが、八幡神に頼朝が祈ったのは、自分こそ、征夷の將軍となり、朝家を護り神祇を崇めようということであった。なお、この場合の「征夷の將軍」とは、征夷大將軍の意ではなく、櫻井陽子が指摘するように、「武士の大將軍」の意であろう。このように、頼朝は、平家に代わって「武士の大將軍」となることを祈ったのであった。このように、延慶本では、頼朝伊豆流離説話は、頼朝拳兵譚の前に、頼朝の「年来ノ宿意」を示す話として、周到に用意されていることが確認できる(早川厚一、一〇七―一〇八頁)。次に、〈盛〉の場合、〈延〉にはば同文ではあるが、〈延〉のよう

に、頼朝の「年来ノ宿意」に触れる事もなく、頼朝の拳兵時に与えられたという後白河院の院宣話等の文脈も削ぎ落とし、ひたすら次に続く文覚話に収束する形に組み立てられている。次に、真名本『曾我物語』の祈誓記事を検討しよう。「八尽くし」記事に続き、次のように記す。「授^ト当国^ノ土民計^ヲ、断^ツ運^ノ墳^ノ腹^ヲ除^ク愁^ノ苦^ヲ悲^ヲ、取^テ愛^ヲ子^ノ敵^ヲ伊藤^ノ入道^ノ首^ヲ手^ニ向^ム我^ノ子^ノ後生^ノ身代^ニ被^レける^ヲ祈^フ念^セ」(四一頁)。愛子の敵伊東祐親入道の首を取って、我が子千鶴御前の後生の身代わりに手向けようとする。こうした記事は、各巻冒頭に内題として「本朝報恩合戦謝徳闘諍集」と記す真名本『曾我物語』にこそふさわしいと言えよう(早川厚一、一一八頁)。この内題は、作者が兄弟の敵討の性格を、親への報恩・孝養(供養)のための闘諍と理解していたことの現れと見ることができ(東洋文庫『真名本曾我物語』1―141頁)。とすれば、〈闘〉も、「頼朝の子の敵、伊東の入道を打ち取らんと欲ふ」とする記事を共有するのは、真名本『曾我物語』に見る形態を引き継ぐためとも考えられよう。○二所権現 箱根権現と伊豆山権現。注解「二所権現・三島明神の御宝殿に秘かに願書をぞ納められける」(一一一―一七頁)参照。○同じき十一月下旬の比 頼朝が、北条時政の娘政子に通い始めた日付。先に、頼朝が、伊東の館を出て、北条へ移ったのは、嘉応元年(一一六九)八月十七日のことであった。〈延・盛〉は日付は記さないが、「其後北条四郎時政ヲ相憑テ過給ケルニ、又彼ガ娘ノ有ケルニ、ヒソカニ通ハレケリ」(〈延〉巻四―一四一オ)と記すように、北条に身を寄せてしばらくして政子のもとに通い始めたとするのだろう。これに対して、真名本『曾我物語』では、頼朝が北条へ移ったのを、治承元年(一一七七)八月下旬のこととする。しかし、

卷三冒頭の記事では、「安元貳年〈丙申〉年從三月半比、兵衛佐殿は北条の妃依不淺御志欲通夜々程、姫君一人御在」（四五頁）とある。つまり、安元二年（一一七六）三月半ばの頃に頼朝は、北条の姫つまり政子のもとに通うようになり、ついに姫君（大姫）が誕生したとする。つまり頼朝と政子との関係は、頼朝が伊東の館を脱出する以前から始まったことになる（『全注闘』上―一六六頁）。しかし、卷二末では、「其の後時政は相具嫡子の小三郎宗時を上洛す是送下る月日、復北条の先腹の姫君被ける通万寿御前の方」（四一―四二頁）というように、時政は、北条に逃げ込んできた頼朝の世話を小四郎義時に託し、自身は宗時を伴って、大番勤めに上洛したとする。そして、「是くて月日を送りたまひけるが」として、頼朝は、北条の先腹の姫君万寿御前（政子）の方に通ったとする。ここでは、頼朝と政子との関係は、頼朝が北条に逃げ込んで以降のこととなるだろう（『延全注釈』卷四―一六九五頁）。とすれば、卷二末の記事は、『闘』の記事と合致することになる。なお、真名本『曾我物語』では、頼朝が北条の館に到着し、泣く泣く助けを求めた時、「北条の四郎時政走り出て取付御馬の手綱に諸共流涙を、奉入奉て様々に」と喜び迎えたとし、このことが、「北条の運の開始」（四一頁）とする。

○故二懸に借（階）老を結びぬ 〈名義抄〉「懸 ネムコロ」（法中八二）。「偕老を結ぶ」は、仲むつまじく過ごすこと。○時政は夢にも此の事を知らず 頼朝が娘の政子のもとに通っていることを、父の時政は知らなかったとする点は、他本も同じ。安元二年（一一七六）三月半ばの頃から、頼朝は政子のもとに通っていたとする真名本『曾我物語』も、この後、都から戻る途中でこの事を知り、「時政は」

被り騒」（四五頁）と記す点は同じ。○北条、大番を勤めて下りける程に 〈延・盛〉「時政京ヨリ下りケルガ」（『延』卷四―一四一オ）、流布本『曾我物語』「北条四郎時政、京よりくだりけるが」（一一五頁）。真名本『曾我物語』も、卷三冒頭では「北条自都下折節」（四五頁）とするが、卷二末では「北条大番廻来上都」（四一頁）と、大番に出ていたとする。但し、真名本『曾我物語』の場合、頼朝と政子との関係は、時政が大番勤めをする以前から始まっていたことになっていて、問題は残る。前々項の注解参照。○路よりして此の事を聞き、大きに驚きながら 〈延・盛〉「道ニテ此事ヲ聞テ、大ニ驚テ」（『延』卷四―一四一オ）。流布本『曾我物語』「道にてこの事をき、ゆゑしき大事いできたり。平家へきこへてはいかならんと、大きにさわぎ思ひけり」（一一五頁）。真名本『曾我物語』では、時政の子義時は、頼朝が政子の元に通っていることを知っていたが、家の面目と思い、素知らぬ顔をしていたのに対し、継母の女房は、我が娘と結婚させようと妬んで、急ぎ手紙を書いて、都より下る途中の時政に知らせたとする。鈴木啓子は、この継子譚を通して、真名本『曾我物語』では、頼朝と政子に奉仕する北条義時にに対し、優柔不断な父時政が対比して描かれていると読む（二六―二八頁）。○平家の威を歎き恐れしが故に 〈闘』では、時政が、娘の政子と兼隆との結婚を約束した理由として記す。当該記事を持たないが、〈延・盛〉も同様。流布本『曾我物語』は、「（時政は）平家へきこへてはいかならんと、大きにさわぎ思ひけり」（一一五頁）とするが、時政は、頼朝と娘との結婚を聞く前に、兼隆との結婚を約束していたとする。その点は、「兼隆都にて取れ智」（四五頁）と記す真名本『曾我物語』も同様。但し、真名

本『曾我物語』の場合は、時政が、継母の「先腹の姫^{（もと）}」を「渡^{（わた）}目代^{（めだい）}方^{（かた）}」者^{（もの）}は、我^{（われ）}娘^{（むすめ）}合^{（あ）}兵衛佐殿^{（へいゑさのどの）}者^{（もの）}」（四六頁）との思いを利用して、強引に兼隆との結婚を推し進めたとする。○伊豆の目代和泉の判官兼隆〈延〉「検非違使兼隆」（巻四―一四一オ）、〈盛〉「前検非違使兼隆」（三―九四頁）、真名本『曾我物語』「当国^{（とうこく）}の目代和泉の判官平の兼隆」（四五頁）、流布本『曾我物語』「平家の侍に、山木判官兼隆、……かの目代兼隆」（二二五頁）。兼隆は、安元三年（一二七七）の延暦寺大衆による強訴事件では、検非違使として後白河院の命を受け天台座主明雲を警衛しているが、治承三年（一二七九）一月に、父信兼の訴えにより右衛門尉を解官され（『山槐記』一月十九日条）、伊豆国田方郡山木郷に配流された（『吾妻鏡』治承四年八月四日条）。翌治承四年五月、以仁王の乱で、伊豆国知行国主源頼政や、頼政嫡子の伊豆守仲綱が挙兵に失敗して宇治に滅ぶと、同年六月二十九日には伊豆国の知行国主に平時忠、伊豆守には猶子時兼が任じられ（『玉葉』治承四年九月三日条）、流人であった平兼隆も、京で形成された時忠との人脈から「当国目代」に任用された（川合康③五九―六〇頁）。とすれば、治承四年以前の話とするわけだから、兼隆を目代とするのは正しくない。なお、永井晋は、時政が平家一門の庶流であれば一族の山木兼隆を婿に迎えたいという気持ちはよくわかるとする（六八頁）。○同じ十二月二日、娘を取り還し、目代兼隆の許へ渡す。年月日を記すのは〈闘〉のみ。頼朝が政子のもとに通い始めたのが、十一月下旬、頼朝のもとから政子を取り戻したのが十二月二日、時政の迅速な処置の程を示す。〈延・盛〉「彼娘ヲ取テ」（〈延〉巻四―一四一ウ）、流布本『曾我物語』「女とりかへし」（二一五頁）。頼朝は、政子のもとに通

ていて同居していたわけではなく、政子を頼朝の元から実力行使で取り戻したわけではない。兼隆の許へは〈闘〉「渡す」、〈延・盛〉「遣シケル」（〈延〉巻四―一四一ウ）、流布本『曾我物語』「とらせけり」（二一五頁）と記すように、嫁取婚の形で記す。○未だ亥の剋に成らざる以前に、秘かに彼の所を逃れ出でて、速やかに伊豆の御山の宿坊に致れり。その日の内の「亥の剋」以前とするのは、〈闘〉のみだが、その日の内に兼隆のもとを飛び出したとするのは、他本も同じ。〈延・盛〉「兼隆が許ニ行タリケルガ、白地ニ立出ル様ニテ、足ニ任テ、イヅクヲ差トモナク逃出テ」（〈延〉巻四―一四一ウ）、真名本『曾我物語』「目代許^{（めだい）}一夜^{（ひとよ）}を^{（を）}明^{（あ）}兼^{（かね）}、則^{（すなは）}其夜^{（そのよ）}内^{（うち）}に出^{（で）}」白^{（しろ）}地^{（ぢ）}へ賞^{（しょう）}シテ様^{（さま）}に」（四八頁）、流布本『曾我物語』「一夜をもあかさで、その夜のうちに、にげいでて」（二一五頁）。なお、伊豆山とする点は同じだが、真名本『曾我物語』は、「伊豆の御山密厳院の卿の律師の坊」（四八頁）と詳細に記す。また、福田晃は、伊豆山とする点について、伊豆山に行けば男女は結ばれるという民俗・あるいは伝承に、頼朝・政子はそれぞれ別々ながら当山に拠っていたという史実が触れて、自然発生的に頼朝・政子は当山においてめでたく結ばれたという虚構なる伝説、史実に反する恋物語が生じた想定されてくる（九九頁）とする。さらに、福田晃によれば、頼朝が、伊豆山に逃れたのは、時の別当密厳院の創始者文陽房覚淵を頼ってのことと考えられる。頼朝は挙兵に先立って、覚淵を招いてその挙兵を明かしている（『吾妻鏡』治承四年七月五日条）。三宝院文書の「密厳院管領系図」所収「伊豆国密厳院々務次第」によれば、覚淵は加藤次景廉の兄弟であった。覚淵が加藤次一門であるとすれば、終始頼朝を擁護してやまない態度は十分に肯けよう。このよ

うに頼朝・政子は、覚淵を通して伊豆山となみなみな関係にあった（二〇一―二〇二頁）と言えよう。○使者を頼朝の許へ立てられければ、十日、右兵衛佐、鞭を上げて馳せ来たる 政子が使者を頼朝のもとに立てたところ、十日に、頼朝は馬に鞭打って急いでやってきたとする点、〈延〉流布本・真名本『曾我物語』は同じだが、「十日」とするのは、〈闘〉のみ。真名本『曾我物語』はより詳細で、供の女房と共に伊豆の頼朝の師匠聞性坊へ入った政子は、そこから北条の頼朝に手紙を書いたところ、頼朝は急いで伊豆山にやって来たとする。〈盛〉は、「彼女ハ終夜伊豆山へ尋行テ、兵衛佐ノ許ニ籠ニケリ」（三―九四頁）。政子は、伊豆山に籠もっていた頼朝を探し出し一緒になったのである。○兼隆は力及ばず止みにけり 兼隆の反応については、〈延・盛〉は次項参照。真名本『曾我物語』「目代大に責ッ、打上^テ伊豆の山^ハ欲^ス遂^ケク^ト合戦^ヲ、佐殿聞^ク食^ハ此由^ヲ付^テモ不^レ浅^キ御歎^ハ」（四九頁）。流布本『曾我物語』「目代はたづねけれども、なを山ふかく入たまひければ、力およびず」（二一七頁）。なお、『吾妻鏡』「散位平兼隆へ前廷尉。号ニ山木判官^ノ者、伊豆国流人也。……是本自依^レ為^ル平家一流氏族^也。然間且^レ為^ル国敵^也。且令^レ挿^ル私意

【引用研究文献】

- * 川合康①「奥州合戦ノート―鎌倉幕府成立史上における頼義故実の意義―」（松蔭女子短期大学文化研究三号、一九八九・6。『鎌倉幕府成立史の研究』校倉書房二〇〇四・再録）
- * 川合康②「横山氏系図と源氏將軍伝承」（峰岸純夫他編『中世武家系図の史料論 上巻』高志書院二〇〇七・10）
- * 川合康③「中世武士の移動の諸相―院政期武士社会のネットワークをめぐる―」（メトロポリタン史学会編『歴史のなかの移動とネットワーク』桜井書店二〇〇七・12）
- * 後藤丹治「曾我物語私考」（国語と国文学、一九三三・4。『中世国文学研究』磯部甲陽堂一九四三・5再録。引用は後者による）

趣^ヲ給^フ之故^也、先試可^レ被^レ誅^ス兼隆^也」（治承四年八月四日条）とある。頼朝が挙兵の手始めに兼隆を討ったのは、「私意趣^也」故とする。政子が山木の館を飛び出して以降の、兼隆と頼朝との確執もその一因となっていた。○北条此れを聞き、娘を勘当せしむ 〈闘〉は、この後に、時政は、娘の勘当を解き、頼朝夫妻を呼び寄せたとする。〈延〉「此事ヲ時政兼隆聞ニケレバ、各憤リケレドモ、彼山ハ大衆多キ所ニテ、武威ニモ恐レザリケレバ、左右無ク打入テ、奪取ニモ不及シテゾ過行ケル」（巻四―一四一ウ）。時政も兼隆も共に憤ったとするが、時政については、この後に、「北条四郎時政ハ、上ニハ世間ニ恐テ、兼隆ヲ掣ニ取タリケレドモ、兵衛佐ノ心ノ勢ヒヲ見テケレバ、心ノ中ニハ深ク憑テケリ」（巻四―一四二ウ）と記す。真名本『曾我物語』は、頼朝や政子に続いて、藤九郎盛長等の侍共も伊豆山に参ったとする記事に続けて、「北条の四郎時政父子三人俱^ニ知^ルニケレドモ此御有様共^ハ、只不^レ知^ル空知^ル居^ル」（四九頁）と記す。流布本『曾我物語』「北条は、しらず顔にて、年月をぞをくりける。伊東がふるまひにはかはりたるにや、果報のいたすところなり」（二一七頁）。

- * 今野慶信「東国武士団と源氏臣従譚」(駒澤大学史学論集 二六号、一九九六・4)
- * 櫻井陽子『『平家物語』の征夷大將軍院宣をめぐる物語』(『中世の軍記物語と歴史叙述』竹林舎二〇一一・4)
- * 佐々木紀一「源義忠の暗殺と源義光」(山形県立米沢女子短期大学紀要四五号、二〇〇九・12)
- * 志立正知「鎌倉期における関東武士の自己意識と『平家物語』」(国語と国文学、二〇〇八・11)
- * 鈴木啓子『『曾我物語』「頼朝拳兵説話」の考察―北条氏の「家」意識をめぐる―」(学習院大学大学院日本語日本文学二号、二〇〇六・3)
- * 永井晋「北条氏と三浦氏のつながりを読む」(三浦一族研究十一号、二〇〇七・3)
- * 野口実『武門源氏の血脈 為義から義経まで』(中央公論新社二〇一一・1)
- * 野中哲照『保元物語の成立』(汲古書院二〇一六・2)
- * 早川厚一「頼朝伊豆流離説話の考察」(松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』笠間書院二〇一五・5)
- * 福田晃「頼朝伊豆流離説話の生成―平家物語・曾我物語より―」(国語と国文学一九六六・6。『軍記物語と民間伝承』岩崎美術社一九七二・1再録。引用は後者による)
- * 福田豊彦『『源平闘争録』の成立過程―千田合戦と伊藤三女の二説話を中心に― 補論 千葉介胤綱・時胤および千田泰胤の系譜上の位置」(千葉県史研究 一一号別冊中世特集号、二〇〇三・3)
- * 元木泰雄『河内源氏 頼朝を生んだ武士本流』(中央公論新社二〇一一・9)
- * 義江彰夫「源氏の東国支配と八幡・天神信仰」(日本史研究三九四号、一九九五・6)